

温泉地における長期滞在化への取り組み

——大分県竹田市「温泉療養保健システム」の事例

大分県竹田市長 首藤 勝次氏に聞く



首藤勝次（しゅとう かつじ）

1953年大分県竹田市生まれ。76年大分県直入町役場に就職。主に企画・広報・国際交流の分野を歩み、炭酸泉を縁としたドイツとの国際交流を推進し、姉妹都市締結を実現。大分県議会議員3期を経て、2009年4月より現職。国土交通省の「観光カリスマ」に認定され、全国的に観光振興や地域振興に活躍するリーダー達と幅広い人脈を持つ。現在は、地域主権の確立を目指し、「農村回帰宣言市」を標榜、竹田らしい、竹田にしかできない施策の展開「TOP運動」を通じた「温泉療養保健適用」制度の確立など、全国初のさまざまな挑戦に取り組む。

世界に通用する 個性的な 温泉地づくりを

「温泉療養保健システム」の導入に至る市長の政策理念をお聞かせください。

【首藤】世界に冠たる温泉資源を持つ日本は、先進地ヨーロッパのように予防医療や免疫力を高める健康づくりのため「温泉力」を活用すべきである。長年そう考えてきました。特に当地では昭和初期に松尾武幸博士が注目して以来、「炭酸泉を核にした世界に通用する個性的な温泉地づくり」を胸に刻んで歩んできました。当時の長湯観光協会のパンフレット

には「東方日本の長湯温泉、西方ドイツのカルルスバード」という意気込みの高さを感じさせるフレーズが残っています。

直入町役場（当時）職員時代の1989年（平成元年）にドイツのバートナウ・ハイム、バーデンバートン・クロツインゲンという3つの炭酸泉の湧出地を訪ねました。当時から温泉療養に取り組みたいという思いがすでにあつたので、バート・クロツインゲン市と友好都市宣言をして帰国しましたが、その後市民交流や文化交流を深める中で「世界に通用する個性的な温泉地づくり」という政策テーマの輪郭がはっきりと見えてきました。そこから外湯巡りや飲泉の文化をテーマにした個性的な温泉地づくりに取り組んできました。

「温泉療養保健システム」 が長期滞在を生み出した

「温泉療養保健システム」は、観光客の動向にどのような影響を与えるのでしょうか。

【首藤】私が2009年（平成21年）に竹田市長に就任してすぐ、「個性的な温泉地づくり」の新たな戦略としてヨーロッパのように温泉療養に保健を適用させる制度を提案し、システムの実証実験を経て導入しました。これまで日本にはなかった先進的な施策です。原資としては入湯税の一部を活用しています。年々制度が知られるようになってシステムを利用する滞在者が増え始

めて、何よりも実際に5泊以上の長期滞在の実績も生まれています。当初は3連泊を条件にしましたが、延べ3泊ということで適用条件のハードルを下げました。これはシステムを広めることを重視して、まず国民の皆さんに「温泉力」を意識してほしい、つまり温泉地に行くとか温泉に滞在するということは気持ちいいのだということを実感してもらえ、環境をつくっていいこうという狙いです。

これまで多くの観光地において何

とかヨーロッパのように長期滞在してもらえないような仕組みはないかというところで、さまざまな模索がなされてきましたが、なかなかこれといった答えは見つかりませんでした。しかし日本にはお米やみそを持って1カ月も温泉地に滞在して元気になつて帰っていくという「湯治の文化」、つまり長期滞在の原点とも言えるようなスタイルがもとあった。「温泉療養保健システム」もドイツをはじめヨーロッパから学ぶ中で生まれたのですが、その原点は日本にあったとも言えます。

長期滞在のために「総合力」を持った温泉地形成を

観光需要の平準化という観点からすると、長期滞在化は大きなポイントになると考えています。そのため観光地づくりという点についてお考えをお聞かせください。

【首藤】ドイツの温泉地の方々とお付き合いする中で「日本には安く長

く温泉に滞在して身体を癒やす素晴らしい湯治の文化があるのに、何をドイツから学ぶのか」という問い掛けもありました。改めて考えると竹田市には温泉以外にも久住高原という心地よい滞在環境があり、岡城のような歴史的な魅力があり、トマトの大生産地

でもあつて地域の食の魅力も持っている。温泉を核にして滞在する人たちのニーズを満たせるような多様な魅力が集積されています。地域づくりにはトータルコーディネートが必要ですし、やはり長期滞在するための保養地として「総合力」を持った温泉地形成が大切だと思います。



国内屈指の高濃度炭酸泉「長湯温泉」旅館街

「温泉力」を活用して国民の健康づくりに寄与

竹田市では「長期滞在の先」にどのような温泉地の将来像を描いていращやるのでしょうか。

【首藤】長湯温泉は1976年（昭和51年）に国民保養温泉地の認定を受けていますが、2015年（平成27年）5月に「竹田温泉群」として対象エリアを竹田市全域に拡大して再指定を受けました。「温泉療養保健システム」は再指定を受ける際の核になる取り組みとしても位置づけています。また、「温泉力」をアピールするためには一温泉地だけでは弱いので、他の温泉地との連携を進めています。今年の7月には豊富温泉（北海道豊富町）、玉川温泉（秋田県仙北市）とで「温泉力地域協力協定」を締結して、日本の温泉力をシンボリックに見せていこうとしています。

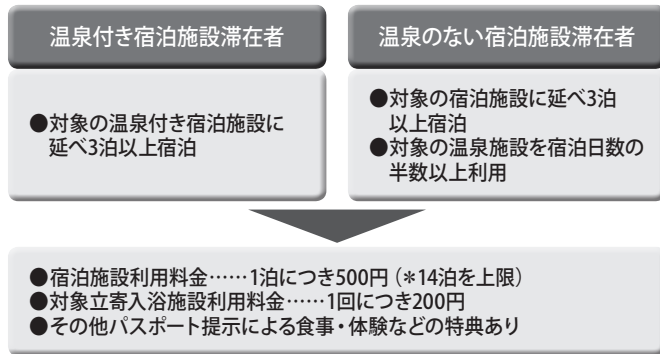
目標がなければチャンスは見えないと思いますし、ビジョンがなければ決断はできません。ビジョンを見失わずに30年間歩んできた流れが今に結実しています。これからも「温泉力」を活用して温泉地が国民の健康づくりに寄与するというビジョンをさらに追い続けたいと考えています。

（しゅとう かつじ）

（2015年9月11日電話インタビュー）
聞き手…堀木美告

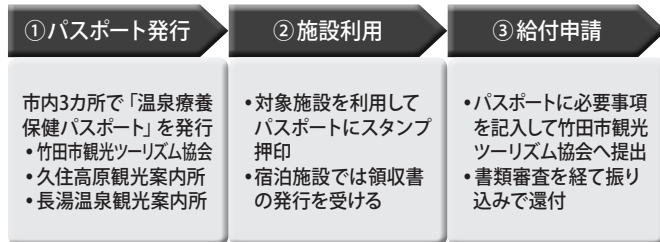
温泉療養保健システムの概要

温泉療養保健システムの対象と保健適用の内容



*パスポート発行から6カ月以内に利用・申請する必要あり

温泉療養保健システムの利用の流れ



温泉療養保健システムの利用の流れ

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
パスポート発行部数(冊)	783	912	1,057	1,115
申請者数(人)	543	623	657	760
給付総額(千円/年)	1,680	1,961	2,180	2,219
給付額平均(円/人)	3,094	3,128	3,319	2,919
宿泊総数(泊)	総数	2,877	3,470	3,505
	平均	5.2	5.5	5.3
立寄入浴数(回)	総数	1,208	1,176	2,237
	平均	2.2	1.9	3.4

- 「参考資料」
- ・竹田式湯治HP
<http://www.takeda.jp/onsenryoyo/index.html>
 - ・長湯温泉旅館組合公式サイト
<http://ながゆ温泉.net/>
 - ・温泉療養文化館 御前湯HP
<http://www.gozenyu.com/index.html>
 - ・「温泉地再生 地域の知恵が魅力を紡ぐ」久保田美穂子(学芸出版社、2008年)

当初は「期間内に3連泊」が給付を受けるための条件であり、湯治を含めた長期滞在の潜在需要の顕在化が期待された。しかしターゲットとして想定していた30代女性にとつての利用のしやすさなどを考慮して、2012年度(平成24年度)からは「期間内に延べ3泊」という条件に修正された。この条件の緩和は滞在の長期化だけでなく、システム利用期限内のリピートによる来訪時期の分散化にもつながっていると思われる。滞在化と分散化の両面から需要の平準化に貢献しているものと考えられる。

長湯温泉(大分県竹田市)は久住山系東麓の高原に位置し、芹川沿いの田園地帯に広がる温泉地である。風土記にも記載が見られる歴史を有し、高濃度の炭酸泉が特徴で、昭和初期に炭酸泉の効能について研究した松尾武幸博士(九州帝国大学)は「飲んで効き長湯して利く長湯のお湯は心臓胃腸に血の薬」との言葉を残した。1989年(平成元年)に旧直入町(2005年[平成17年]4月に合併して竹田市)がバート・クロツインゲン市と姉妹都市提携を結んだのは

はじめ、ドイツの温泉地との交流も進めながら古くからの湯治文化を活かした独自の温泉地活性化に取り組んできた。個性的な飲泉場や温泉療養文化館「御前湯」などの施設整備を進める一方で、「温まる」「歩く」「食べる」「笑う」を組み合わせ、竹田市の温泉、自然、文化をトータルに楽しみながら元気になる「竹田式湯治」の展開を図っている。2011年度(平成23年度)にはこの「竹田式湯治」による長期滞在をバックアップする仕組みとして、温泉を利用した滞在に保健を適用す

る「温泉療養保健システム」を全国に先駆けて導入した。「温泉療養保健システム」は、豊かな温泉を健康づくりに取り入れるため、温泉を使った滞中に保健を適用する制度で、竹田市内の対象宿泊施設を延べ3泊以上利用する宿泊者が対象となる*。利用者は「温泉療養保健パスポート」を各施設で提示してスタンプ押印を受け、パスポートの必要ページと領収書(原本またはコピー)とともに竹田市観光ツーリズム協会へ申請を行う。1泊当たり500円の宿泊費

と1回当たり200円の入湯料が還付される。なお、利用・申請の期限はパスポート発行から6カ月以内である。2014年度(平成26年度)のパスポート発行部数は1115冊で申請者数は760人であった。

*温泉のない宿泊施設に滞在する場合は、延べ3泊以上宿泊することに加え、対象の温泉施設を宿泊日数の半数以上利用することが条件となる。